

令和 7 年度第 1 回桑名市総合教育会議 議事要旨

日 時・場 所	令和 7 年 8 月 25 日（月）午後 15 時 00 分～16 時 30 分 桑名市役所 3 階第 2 会議室
出 席 者	桑名市長、教育長 教育委員： 4 名 事 務 局： 13 名 講 師： 1 名
議 事 次 第	1. 【協議事項】次期教育振興基本計画（くわなっ子教育ビジョン）策定に向けて 2. 【報告事項】桑名市部活動地域展開について 3. その他
要 旨	1. 【協議事項】次期教育振興基本計画（くわなっ子教育ビジョン）策定に向けて ①現行教育ビジョンの総括と、地域教育ビジョンの方向性について 事務局から資料に基づいて説明 ・教育委員会としては、今年度から新たな教育ビジョンの策定に向けて準備を進めていく。策定準備期間は、令和 7 年度、8 年度の 2 年間。令和 9 年度から実施していく予定。 ・教育委員会事務局の事務点検評価では、有識者から主体的・対話的で深い学びの実践が進展した一方で、就学前からの切れ目のない支援体制の構築や、学習意欲の向上、特別支援教育の強化に課題があると指摘あり。 ・桑名市も三重県教育ビジョンを十分参考にしていきながら、桑名市ならではの視点で、柱立てをしていくことで、現在に見合う実践的な教育ビジョンを目指していきたい。 ②本市の現況を踏まえた新教育ビジョン策定のポイント配慮事項について 愛知教育大学 野田学長の講演 資料に基づき講演 ・北海道大学の恐竜研究者、小林教授の「勉強するな」という話。「勉強」は字にもあるように強いられてやることであり、発想が乏しくなり発展性がない。「学ぶ」ということは、表現を持ったことを「探究」することであり、楽しいこと。 ・砂遊びをする 5 歳の幼稚園児を観察すると、いろいろ工夫しながら楽しんでいる。幼児教育の場から粘り強く取り組み、積極的にチャレンジしていける場を設定していくことは大事。 ・最も大事なものは、学習内容や方法ではなく、教師の子どもへの関わり方、その連続性である。小学生のももこさん（仮名）がお世話になった保育園の先生にあげたひまわりの種を先生が育て、花を咲かせた様子の写真を手紙と共にももこさんに送るという、入れっぱなし、出しっぱなしではなく、常に子どもを支え、寄り添い見守る姿勢が、その連続性において大事。 ・AI を活用するには、自分で課題を見つけて、問いを立てて、解答できる力が必要。 ・小中学校の総合的な学習の時間は非常に大事。

- ・学習指導に沿って子どもをレールに乗せることよりも、子どもの思考に合わせた探究活動や学習過程等を組まないと、本当の追究、探究にはならない。
 - ・課題は、子どもたちが「追究したいのは何なのか」を重視し、いくつかの課題の中から子どもたち自身が選べるようにする課題設定に時間をかけるべき。
 - ・何年生で何をするという課題が決まっていることが多いが、そうではなくて、自分たちで課題を見つけ、こんな事が予想出来る、こんなことをしてみたいと追究していくことが大事。
 - ・教師も「ここへ行きたい、こんな課題を追究したい」という羅針盤（灯台の光）を持つことは大事だが、子どもたちの自由な探求を尊重し、課題のとおりいかずに学年が終わってしまってもありだと思ふ。その過程が大事であり、答えのない課題に対して向き合う力を育成することになると思う。
 - ・教員採用試験の全国平均の倍率が去年は小学校で 2.2 倍の低水準で、教師の魅力が薄れてきている。
 - ・魅力は時代によって変わるが、「〇〇先生みたいな先生になりたい」という姿を見せられる様な教育委員会としてのバックアップが重要である。
- ③新教育ビジョン策定に向けて、本市が大切にしていけるべきこと
意見交換
- ・小中一貫になるとどんな風に教育活動を区切ってメリハリを作るといいのか。
→桑名市は 4 年 3 年 2 年で区切れる。
 - ・教育活動の切れ目は学校、学校の特色によって作れば良い。
 - ・節目をつけることによって、そこで子どもはグッと成長する。
 - ・教師の子どもへの関わり方は、節目を超えても常に一定にしておくべき。
 - ・高校は中学校に比べて多様性があり、生徒が進む方向も異なるため、小中一貫で 9 年間過ごすと、高校でのギャップが大きい。このギャップを埋めることについては、答えのない課題であるが、ある程度のギャップは子どもが成長する上で必要ではないか。
 - ・教師が子どもへ丁寧に関わるには、教師へのゆとり（時間的余裕）が必要だと感じる。
 - ・時代が早く進む中ですぐに結果を求めたい傾向にある。目標など固まってしまった考えの方が楽だとなりがち。
 - ・先生の負担が大きく、重くなってきており、カリキュラムがあった方がやり易いのではないかという意見もある。
 - ・今は昔の講義ではなくて、アクティブラーニングができる教員を育てる方向に変化している。
 - ・課題探究をさせる方が、教師の力量はいるが面白さはある。そこに教師の魅力がある。
 - ・新しい教育を受けて来た子達が入ってくると、組織も活性化していくことに期待。
 - ・「先生は働きすぎ」と言われるが、やりたいと思えば遅くなっても働けるのは先生の魅力だと思う。
 - ・生き生きと学べる様に先生も生き生きしている方がいい。子どもが生き生きする

為には家庭基盤（安心・安全）が大事なので、基盤を作っていくことに力を注いでほしい。

- ・これからの教育は、生きる力を育む力が一番大事。
- ・保護者の過干渉、過介入で教師のメンタルを壊し、ベテランになっても保護者対応で困る。
- ・以前と比べて、教師と保護者との境がなくなっている。
→保護者の意識が変わり、両者が対等になってきている。
- ・保護者との信頼関係を築くためには、間接的な情報交換ではなくて、対面による直接的な情報交換が重要である。家庭訪問は子どもの実際を見て来て、保護者の方とのやりとりができて大事だが、個人面談の機会も減っている。
- ・多忙や過干渉等により昨今は教員人気がない。教育養成研修系の大学を出ても教員にならない。
- ・先生が先生として生き生き働けるところをどう作るか。
- ・多様性を尊重し、互いの良さを生かすことは、教員も一般社会も大事である。「みんな仲良く」ではなく、合わない人とも共存できる術を教えるべき。
- ・勉強さえすれば良い企業に入って「幸せな」というのは一昔前で、AI の様な技術の進化により、今やそれは変わってきている。その結果、現状では「学ぶ」と「働く」が繋がっていないように感じる。
- ・勉強して外へ出て行ってしまう子どもも多く、地域に働く人がいなくなる。特に地域の課題を追究させる過程で、地域への愛着や地域に残りたいという意識の高まりが期待できる。
- ・AI に代替できないエッセンシャルワーカーや土木技術者がいなければ地域社会は成り立たないにもかかわらず、なろうとする人がいない。世の中の課題や仕事にリンクした教育をして欲しい。
- ・学童運営の経験から言うと、保護者と子どもとの関係が悪い時にクレームが増える傾向がある。学童サービスと家庭の協力との線引きを明確にすることで、問題が減った。保護者はサービスの受け手ではなくて仲間として捉えるべき。

2.【報告事項】桑名市部活動地域展開について

事務局から資料に基づいて説明

- ・背景として、少子化により学校単独での大会出場ができないことや、そもそも希望する部活動がないといったことなど、子どもたちのニーズへの対応が困難になっている現状がある。また、アンケートによると教員の約6割が休日部活動に負担を感じているということがある。
- ・スポーツ文化活動の大転換期であり、生涯にわたって取り組み続けられる活動の出発点と捉えている。
- ・休日の部活動の地域展開は、令和8年度中に全ての種目で完了を目指す。
- ・令和8年度の秋以降、中体連以外の協会や連盟が主催する大会については、地域クラブから出場していき、令和9年度の秋以降は、中体連の大会を含め、すべての大会について、地域クラブから出場していく。

- | | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none">・不安解消のため、市が一定の基準を満たしたクラブを公認する「公認地域クラブ制度」を導入し、公認クラブは学校施設を優先的に利用できる。・公認クラブの指導者は基礎研修を必須とし、ACC（アスリートキャリアセンター）による指導力向上研修も受講可能となる。・くわな地域クラブを継続して運営していくために、市の担当部局に管理事務局を置き、一定の事務を担っていきたいと考えている。多岐にわたるクラブ運営をすべて、地域クラブに担ってもらうのではなく、当局と連携、支援することにより継続した地域クラブ運営と、指導者にとってはより少ない負荷でやりがいを感じられる形をめざしていく。・現時点で考えている、管理事務局が担う主な業務としては、「公認地域クラブの支援」「指導者に関すること」「対外的な対応」がある。地域展開に向けた大きな課題として、「指導者の確保」「財源の確保」「家庭負担の増大」「情報発信」が挙げられる。これらの課題を解消し、持続可能な地域展開としていくためにも、管理事務局の役割は非常に大きいものになると考えている。・桑員地区とのすり合わせが必要。 |
|--|---|

3. その他

事務局より、次回の予定について連絡

(以上)